

## 追悼！ 廣澤一男

共産主義者同盟首都圏委員会の廣澤一男が急逝しました。2015年12月12日午前1時、享年69歳。胆管癌でした。

「大きな人」であった。「包容力」の人であった。この彼のたぐいまれな資質は、誰しも認めることでしょう。そして彼の包容力は、その公平さ、公正さにおいても群を抜いていました。革命家に与える言葉としてふさわしいとは思いませんが、彼ほどの「守り」の人を私は知りません。かつて、分派闘争において、総崩れになるところを踏みとどまり、反転攻勢の時を準備する、掛け値なしに彼なしでは、今日の首都圏委員会はありませんでした。そしてその「守り」は、最後に、果敢な決断へと我々を導いてくれたとも言えます。三年前、60歳で亡くなった川音勉が、廣澤とは全く別な資質を持つ、鋭利な、「攻め」の人であったことと好対照でした。

「守り」と言えば、「頑健かつ繊細」であったことも特筆されるべきだろうと思います。「墨攻の人」と言えば彼は怒るかも知れませんが、現在の首都圏委員会の源流を創り出した共産主義者同盟遊撃派時代、議長、書記長を相次いで失った時、第一次ブントからの革命性を継承し、ブント系のみならず、「潮流を超えた団結」を訴えました。まだ三十歳代でした。滝沢範治名で「遊撃」紙上で連載した「国際共産主義運動上における毛沢東思想・路線の位置」が時代的制約はあれ、画期となりました。ここでもう一つ、遊撃派政治理論誌『ボルシェビキ』創刊号の「沖縄解放委員会」（廣澤同志執筆）論文を挙げたいと思います。ここに、今日も引き継がれるわが首都圏委員会の沖縄の自決権支持・自立解放連帯の闘いに持てる力を集中してきた原点があります。

今から振り返れば、悪戦の連続であり、決して勝利的に展開されたものとは言い難い「分派から統合の時代」における闘いも、さらに統合の一時代の終焉以降も、彼は全精力を傾注し同盟を牽引し続けました。

今夏、多くの共産主義人士、友人とともに、反戦実（集団的自衛権法制化阻止・安倍たおせ！反戦実行委員会）結成を克ち取り、新たな反安保闘争を再建し、その最先頭で闘い抜いてきたことは、記憶に新しい事と思います。廣澤同志は、体調不良を顧みず、澎湃と湧き上がる民主主義的憤激に対して、何としても次世代共産主義運動を創出し、新しい地平を切り拓くための礎石となる。これが「我々の世代の仕事」と見定めていました。

敢えて言わせて戴くことをお許し願えれば、この五〇年近くの日々は、彼とともにありました。そして最後の最後、持てる力を振り絞っての「攻めの廣澤」に伴走し、文字通り渾身の力で闘い抜いた廣澤一男と共に生き抜いてきたことは、私の誇りです。

若い人たちが、我々のいたらなさを乗り越えて、次の時代を突き進んで行くことでしょう。これこそ彼が望んで止まないことでした。合掌。

大杉 莫

二〇一五年一二月一六日